

# ゴルトベルク変奏曲

～「音楽の父」大バッハの名曲を弦楽トリオで～

## オール・バッハ・プログラム

### 第Ⅰ部

無伴奏チェロ組曲 第1番より 前奏曲……………(カンタ)  
二声のためのインベンションより 第1番、第8番、第15番……………(奥村&カンタ)  
無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番より シャコンヌ……………(奥村)

### 第Ⅱ部

主よ、人の望みの喜びよ……………(全員)  
ゴルトベルク変奏曲(シコヴェツキー編)より  
アリア～第1、2、3、7、8、9、10、11、12、16、17、18、22、23、24、28、29、30変奏～アリア……………(全員)

冬

2022  
四季コンサート

2022年12月11日(日) 17:45開場 18:30開演

会場: アクトシティ浜松 中ホール

主催: 浜松音楽友の会

## プロフィール

### 奥村 愛(おくむら あい) ヴァイオリン

7歳までアムステルダムに在住。桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースで学ぶ。辰巳明子氏に師事。第68回日本音楽コンクール第2位など受賞多数。2002年、デビューCD『愛のあいさつ』発表。一躍楽壇の注目を集める。以来AvexClassicsより数々のCDをリリース。近年は渡辺香津美や小沢健二らの新作レコーディングに参加。国内の主要オーケストラや、世界各国のオーケストラとの共演を多数重ねている。「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」「富士山河口湖音楽祭」をはじめ、国内の音楽祭に多数参加。リサイタル活動の傍ら「キッズのためのはじめての音楽会」をプロデュース。自身のライフワークとして位置付け、長年に渡り全国各地で上演を続けている。自然体なトークも好評を得ており、テレビやラジオへの出演も多い。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。使用楽器は1738年イタリア製カミロ・カミリ。2022年、デビュー20周年を迎えた。

### 御法川雄矢(みのりかわ ゆうや) ヴィオラ

10歳よりヴァイオリンを始め、その後、ヴィオラに転向。桐朋女子高等学校音楽科を経て2003年桐朋学園大学音楽部を卒業。2001年ピアニストの村上弦一郎氏と共にGEN室内管弦楽団を立ち上げる。2005年5月大阪国際室内楽コンクールにて弦楽四重奏の部セミファイナルに出場。2009年2月NHK交響楽団入団。2011年8月エレメンツ・カルテット台湾公演を行い地元メディアにも大きく取り上げられた。これまでにヴァイオリンを市川映子、ヴィオラを故 江戸純子、指揮を故 堤俊作、室内楽を故 青木十良、各氏に師事。現在、NHK交響楽団ヴィオラ奏者、小松亮太オルケスタ・ティピカ、エレメンツ・カルテットのメンバーとしての活動の他、指揮者としても活躍している。

### Ludovit Kanta(ルドヴィート カンタ) チェロ

スロヴァキア共和国出身。プラハ音楽アカデミーにて、元チェコトリオのS.ヴェチトモフに師事。在学中にスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団の第1ソロ奏者に就任。1990年より2018年3月まで長きにわたりオーケストラ・アンサンブル金沢の首席チェロ奏者を務めた。現在OEK名誉楽団員。さらにソロ・室内楽を中心に国内外で活動している。H=O・ベートーヴェン・コンクール優勝、プラハの春国際音楽コンクール銀賞、チャイコフスキー・コンクール入賞。ソリストとして岩城宏之、コシユラーらの指揮で、OEK、N響、スロヴァキア・フィル、プラハ交響楽団等と共演。CD録音も数多く「レコード芸術」特選盤に何枚も選ばれている。2010年「岩城宏之音楽賞」受賞。趣味は空手(2段)、登山、写真。

ゴルトベルク変奏曲

～「音楽の父」大バッハの名曲を弦楽トリオで～



## オール・バッハ・プログラム

### ●無伴奏チェロ組曲 第1番より 前奏曲

バッハのチェロ組曲は、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジグの4つの舞曲を基本構成とし、その冒頭に自由な形式の前奏曲、途中で作曲当時に流行した舞曲1曲がおかれて、全6曲からなる。第1曲目となるこの前奏曲は、流れるような16分音符の音型が微細な緩急とダイナミクスの変化を通じて豊かに表情を変えていく。伸びやかな旋律が、たった一本の旋律でありながらポリフォニーのように和声を浮かびあがらせ、不協和音と解決を繰り返して緊張感を高めていく。

### ●二声のためのインベンションより 第1番、第8番、第15番

原曲はクラヴィーアのための15曲からなる作品であり、対位法の厳格で簡明な様式美が際立つバッハの代表作。自筆譜に記された「インヴェンツィオ (Inventio)」の語はもともと「着想」や「発見」を意味しており、楽曲全体を構成する際に核となる主題の発想を重視したバッハの思いが反映されている。第1番は冒頭に現れる小さな主題のみを用いた簡潔な対位法形式で、抑制的ながらも一貫性をもち、バッハの「インヴェンツィオ」を体現する作品といえる。第8番は華やかさを感じさせる分散和音で始まる。3つの主題提示部をもち、第1および第3提示部は上声部を下声部が追いかけるカノン形式、第2提示部では転調を繰り返して主題が展開される。第15番は対位法を基礎にはいるものの、曲全体ではより自由なカプリッチョの形式をとっている。3つの主題提示部のあいだに間奏をはさみながらミステリアスな短調の音楽が展開される。

### ●無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番より シャコンヌ

〈シャコンヌ〉は全5章からなる組曲《パルティータ》の最終章にあたる。最終章は、他の4章すべてを合わせたよりも長大で、高度な技巧が際立つことから、しばしば独立して演奏される。バロック時代に流行したシャコンヌは変奏曲の一種であり、1つの旋律パターンを何度も反復するなかで新たな進行をつくりだしていく特徴を持つ。バッハのシャコンヌもまた冒頭で提示した主題を対位法的技法や声部の転回を駆使しながら30もの変奏へと昇華させ、全体を緊張と弛緩が波のように行き来する音楽として提示する。主題は重音奏法に依拠した和声進行を基本としており、1台のヴァイオリンでありながらオルガンのような音色を生み出す。

### ●主よ、人の望みの喜びよ

原曲は教会カンタータ《心と口と行いと生活で》の第6曲と終曲に登場するコラールだが、さまざまな楽器に編曲されて演奏されていることからコラール単体が一つの楽曲として広く親しまれるようになった。冒頭がよく知られた主題は、穏やかな3連符のリトルネッロで始まり、小さな音のまとまりを何度も反復しながら主題を刻みこむ。リトルネッロの途中に簡潔で伸びやかな旋律のコラールをさしはさみながら静かに進行する。

### ●ゴルトベルク変奏曲 (シトコヴェツキー編) より

アリア～第1、2、3、7、8、9、10、11、12、16、17、18、22、23、24、28、29、30変奏～アリア

クラヴィーア作品が原曲で、作曲時には《チェンバロのためのアリアと様々な変奏》と題されていたが、のちに「ゴルトベルク変奏曲」という名称で知られるようになった。バッハと親交があったカイザーリンク伯爵の不眠症を癒すために作曲された曲を当時のクラヴィーア奏者ゴルトベルクが演奏したことから「ゴルトベルク変奏曲」と呼ばれるようになったという逸話がある。主題となるアリアを30の変奏へと展開し、最後に再び主題のアリアへと回帰する構成で、全曲で60分ほどの演奏時間をもつ長大な変奏曲となっている。本日は、アリアで始まり、第1～3、第7～12、第16～18、第22～24、第28～30の変奏を経て締めくくりのアリアまでを抜粋して演奏する。主題は装飾音を多用したサラバンド風の音楽で、高度な技巧を要求する。第15、21、25の3変奏以外は一貫して基調のト長調を貫き、各変奏の長さもほとんど同じ小節数を保ってはいるが、緻密に計算された変奏の配置により単調さは感じられない。特に、演奏上の技巧性とバスの変奏を巧妙に展開させたことで30もの変奏を見事に設計している。